こないだマジック・ショーを見る機会があった。プロのマジシャンではなく、皆、アマチュアなので、手先は危ういし、ときには失敗するものもある。トランプを落つことしたり、出るはずの鳩が出てこなかったり……。そういうときは、やってるマジシャン本人も素に戻って苦笑いしたりする。

「マジ・苦笑」というやつである。

つづいて、北国の話である。冬は雪に閉ざされるので、春まで退屈しようがない。退屈しのぎに、家のなかにあるいろんなものがバンドを組んだ。冷蔵庫はギタリスト。洗濯機がベース弾きである。テレビはピアニスト。風呂釜がボーカル。机や椅子がホーンセクション。

「じゃあ、ボーラーは？」

もちろん、ボーラーはドラマーである。

つづいて、アフリカのジャングルでの話である。

「このあたりは昔、カバがいっぱいいたんだけど、乱獲で絶滅寸前で今はほとんどいないんだって」

「カバいそうね」

それだけである。

さて。

ようやく小説すばるではじまる連作シリーズの第一回目の原稿があがった。5月17日に発売される小説すばる6月号に掲載される予定である。連作の通しタイトルは、「笑酔亭梅寿謎解晰」。第一回は「たちきり線香」。上方落語の世界を

舞台にしたミステリっぽい話だが、いわゆる「本格」ではない。ミステリ的な要素はちよこつと出てくるだけである。

それなのに「謎解晰」というのはいかななものか、とも思っただが、ほかにいい題名が思いつかないのでしかたない。笑酔亭梅寿というのは、上方落語会の重鎮で、長老格の噺家であるが、よくいえば豪放磊落、悪くいえばむちゃくちゃなおっさんで、大酒飲み、がさつ、すぐカツとなる、でたらめを言う……。ただ、芸には熱心で、手を抜いた、投げやりな高座も多いが、十何回に一度、信じられないような出来映えのよい、高揚した高座をつとめることがあり、客もそれを承知している。ジャズでいえば、セロニアス・モンクみたいな人物である（ちよつとちがうか）。と、ここまで書いてくれば、あの人をモデルにしているのだろうと察しのよいかたはわかるだろうが、そうなのである。この梅寿師匠のところに、落語にまるで興味のない、金髪でモヒカンの若者が、むりやり弟子入りさせられるところから、話がはじまる。実は、この連作は、私にとってはじめての「フツ」の話」である。怪物も妖怪も幽霊も宇宙船も鬼も天狗もでてこない、フツの人たちがフツにしている話を書くのは、デビュー短篇の「落下する緑」以来であり、長い話としては生まれてはじめての経験である。こんなもん、おもしろいかなあ……といいながら書いている。不安だよなー。怪物にも妖怪にも幽霊にも宇宙船にも鬼にも天狗にも頼れないわけだからなー。まあ、ミステリ作家の大半は、怪物も妖怪も幽霊も宇宙船も鬼も天狗もでてこないそういうフツの話を毎日毎日書いてはるわけですが……。

この連作の監修をお願いしているのが、月亭八天さんである。去年の末にインタビューの前半を掲載したが、ようやく後半を載せる気力が少しだけでてきた。というわけで、お待

たせいたしました。月亭八天インタビューの後半である。

落語会のお手伝いが終わって、家に帰ってからはどうして
るんですか。

月亭八天（以下、八と略す）「ぼくに限ってというと、家に帰
ったら、奥さんに言いつかった用事をしながら、寝ずに師匠
が帰るのを待っています。でも、奥さんが『寝ててもええで』
と言ってくれはったら、ほんとうは寝てもいいんですが、ぼ
くは寝ずにひたすらネタをくってました。師匠が帰宅された
ら、肩を揉みながら芸談をいろいろ聞かせてもらったり、今
日の反省をしたり……たまにはそれが深夜におよぶこともあ
って、師匠が寝はったら、ようやく自分の部屋へ帰って、寝
ることができました」

師匠が仕事で旅に出ているときとかはどうなんですか。
八「ぼくについていえば、師匠が二、三日いないときは、自
由でしたね。やっと日曜日がきたっていうか休みがとれてホ
ツと一息、ちょっと羽根を伸ばすことができました。それだ
け修行中は毎日が精神的圧迫に押しつぶされそうになってる
んです。だから線の細い者は二二で脱落して辞めていきます。
つまり、平常に戻ったときに、はじめてそのギャップの大き
さに気づき、またもう一度勘難苦行の生活に戻れないんです。
そして鬼（師匠）の居ぬ間に自分の時間を有効的に使おうと
考えているうちに、あっけなく時が過ぎ、結局何もできない
まま空港や駅へ師匠を迎えにいきました」

師匠の旅についていくことはないんですか。

八「ときには、旅についていく場合もありますが、ぼくはめ
ったに連れていってくれはりませんでした。あと、師匠によ
っては、旅に出ているときでも家の用事が山ほどあるところ
もありますし、長期出張中の場合は『やぶいり』といって実

家へ帰ってもよいという認可がおりるときもあります」

落語会の楽屋入りについてうかがいたいんですが。

八「六代目松鶴師匠は楽屋入りが早かったので有名で、開演の二、三時間まえにはもう楽屋のまんなかにデンと陣取ってはりました（松鶴師匠はたいがいトリにでるので、開演二、三時間まえというと、自分の出番からしたらたいへん早いことになる）。ときには寝そべっているときも。米朝師匠もそうとうイラチなかたですが、とくに各一門のいろんな演者のである落語会なんかですと、早くからいったん楽屋入りされても、近くの料理屋とかへ立ち寄られて、出番まえにはきっちり楽屋に戻ってきはるんです」

ホール落語の場合はどうなんですか。

八「最近、文珍師匠の地方のホール落語に同行することが多いんですが、そういつときは、文珍師匠より先の便で行って、向こうで師匠の到着を待ちます。文珍師匠は、あとの便で、マネージャーとかと一緒に来はるんですね。六時半からの舞台だったら、我々は四時頃に入って、マイクテストや照明のチェックなんかは我々だけでやります。これは、あくまで吉本の場合ですけどね」

演芸場の場合は？

八「落語会は最初から最後までがひとつのプログラムなので、師匠連中も早くに楽屋入りされることが多いですが、演芸場の場合は漫才や喜劇なんかと一緒に、一日二公演や三公演あり、それが一週間や十日間続きますんで、初日で流れをつかんだら、二日目からは出番ぎりぎりに入られるひとが多いです。だいたい一本まえぐらいですね。もちろん、そういうときでも早く来られるかたもいらっしやいますし、気性のちがいでしょ」

二回目の出番までのあいだはどうしておられるんですか。

ハ「売れっ子の師匠連なら自分の出番が終わったら、飛び出しでテレビ局へ走る人もありますし、余興に行かれるかたもありません。時間のあるときでも今は外の空気を吸いにいかれるひとが多いようです。でも芸人は総体にズボラですから、なかには楽屋のロビーでゴロツと寝ころんでいる人（うちの師匠は典型的）もいますけど。昔みたい、次の出番まで仲間うちでわいわいしゃべったり、出前をとってみんなで食べたり、好きなものはトランプや花札という健全な大人の遊びをしたり……そんな風情のある楽屋がなくなってしまったので」

楽屋での弟子の役割は？

ハ「弟子は楽屋でお茶を入れたり、衣装を畳んだり、アイロンを当てたり、靴を磨いたり……もっぱら師匠の身の回りのお世話をします。ふだんは楽屋の入口近辺にずーっと立っていて、用のあるときは楽屋の中から『おい』と呼ばれ、すぐさま飛んで行かなければなりません。そして出番が近づくと師匠に知らせ、衣装の着替えを手伝います。べつに進行係と呼ばれる見習いがありますが、師匠の用のないときは舞台袖にある進行部屋で息抜きをしたものでした」

進行係というのはどういう人ですか？

ハ「まだ師匠についていないもので、舞台の進行をとめながら、自分にあつた師匠を探しているんです。我々修行中の弟子は、そういう『進行』と同格といつことになりますね。でも、進行部屋はたまり場でちよつとした憩いのひとときが持てるんです。これは梅田花月やなんば花月（吉本系）のことですが、角座や浪花座（どちらも松竹系）もおそらく同様だったと思います」

楽屋の様子も、場所によつてちがうんでしょうね。

ハ「そうですね。くわしくは知りませんが、浪速座では、看

板さんの楽屋は隣接している二、三部屋の個室で、ほかの人たちは大部屋だったそうです。大部屋のなかでも、序列がはつきりとあったそうです。上のひとの化粧前にまちがって座ったり、荷物を置いたりしていると、えらい怒鳴られたそうです。旧なんば花月は、二階に新喜劇の楽屋が、一階に噺家とか漫才、奇術なんかの楽屋がありました。また、うめだ花月の楽屋は一名『船底』と呼ばれ、らせん階段を地下へ地下へとおりていきます。たしか新喜劇の役者さんはやはり二階、演芸の方は船底だったように記憶してます。一番下は地下三階になり、そこから舞台まで上がってくるのが大変でした。修行中の弟子はそこを全速力で昇り降りしました」

小さな落語会の場合は？

八「楽屋がないことも多いです。普段は食堂になっている場所を使って行われるある落語会では、三畳ぐらいの小さな部屋が楽屋がわりで、着替えるひとだけがそこに入ります。出番前には、他の演者と一緒に厨房で椅子を並べてお茶を飲んだりしてます。もちろん見習い、弟子連中は袖で太鼓鳴物に携わりながら、今出てる演者の舞台を見て、しっかり芸を盗んでいます」

話はかわりますが、東京にある真打ち制度（前座・二つ目・真打ち）が上方にはありませんね。

八「実は、昔は、上方にも真打ち制度がありました。前座、中座、真打の三段階だったそうで、東京でいう二つ目が中座に当たるそうです。でも、東京の落語協会や落語芸術協会などが興行会社をかねているのに対して、関西の芸人はそれぞれプロダクションに所属している者が多く、ランク付けがしにくいところから、真打ち制度は自然と消滅したのではないのでしょうか。それに上方落語界が滅びかけてたときだけあって、それどころやなかったと思います」

それでは、このへんで噺家のかたの一年の流れをご紹介します。ただですか。

「まず、正月ですが、私の場合は、以前は午前中に師匠八方のもとへ新年の挨拶にうかがい、その足で米朝師匠のお家へ参るのが恒例でした。そこで黒紋付に着替えて、十二時になったら一部屋へ勢揃いして、一番上の方が新年の挨拶をされると、それに返して米朝師匠から訓示が述べられる。それから全員でぞろぞろ近所の神社へ初詣に行ったものですが、ここ三、四年はそれもなくなって、正月二日のサンケイホールの独演会（今年から一門会）の開演前に、新年の御挨拶の式をするようになりました。またうちの師匠も正月は家におられることが少ないので、このごろでは携帯メールで年始の挨拶を済ませているという次第です（なんちゅう一門や）」なるほど。

八「春は花見があつて、夏には『夏のご挨拶』があります。これは年末年始ほどきつちりしたものではありません。お中元をもつていって、半年間ありがとうございました、残り半年もよろしく願います、と挨拶するんです。年末には、十二月十三日に『ことはじめ』があつて、これがお歳暮と年賀を兼ねています。服は洋服の正装で、米朝師匠のお宅に集まります。『ことはじめ』というのは正月の準備が始まる口であり、我々芸能の世界ではこれが正月に当たります。今年もよろしく願います、という挨拶をするので、実質的な新年会ですね」

最後に、噺家さんのギャラのことを教えてほしいんですが。ちよつと言にくいですか？

八「そんなことはありませんよ。今では、内弟子のギャラを師匠に渡すということはあまりないでしょう。本人の収入になります。落語会に出演すると、内弟子でも交通費くらいはい

ただけます。太鼓とかのお手伝いをして寸志をちょうだいできるときもあります。弟子の一日の手当てについては、出納帳をきっちりつけさせる師匠もいますが、吉本ではむかしから一日千円というのが普通ですね。この中から交通費も食費も生活費も捻出するのですから……。今では辛くて厳しくも懐かしい思い出になりました」

今日は長い時間ありがとうございました。

田中哲弥（以下、弥と略す）「ほな、飲みにいきましょか」

というわけで、二回にわたってお送りいたしました月亭八天インタビューですが、お楽しみいただけましたことと思います。次回はまた「ああいう」やつにもどりますので、よろしく。あ、そうそう、小説すばるの連作もよろしくつ。

なお、月亭八天さんの出演する落語会のスケジュールなどは、八天さんご自身のホームページでご確認ください。このページは、上方落語に関する情報満載なので、ぜひチェックしてみてください。

（了）